ふるさと再発見！ vol. 2

ほうぼうわかやま

HOUBO WAKAYAMA

FREE

巻頭特集

心を改めて、年を越す

『正月様ござった』日本の文化・伝統の文化

●紀州の歴史・文化

漁師の町「加太」

鯛の一本釣りはまさに男のロマン

●散策

道を楽しみ・歴史に浸る

和歌山城～秋葉山の「緑道（みどりのみち）」

●施設紹介1

紀伊風土記の丘

考古・民俗と自然のミュージアム

和歌山市立博物館　年賀状に映る、時代の世相

インタビュー1

前田泰道氏

救世観音宗 総本山 紀三井寺副住職

心を改めて、年を越す

Taido Maeda

1958年和歌山市生まれ。京都大学文学部仏教学科卒業。現在は、平成20年に完成した日本最大の立像仏を有する紀三井寺の副住職として多忙な日々を送っている。また、「わかやま新報」などに不定期でコラムを執筆している。

もうすぐ新しい年を迎える、そう思うと何か心が躍る。というのはきっと昔の人達も今も変わらないだろう。久々の親戚との再会や、紅白歌合戦などなにか特別な時間のような気もする。

「お正月」とはどんな行事なのか。楽しいこともたくさんあるがそれだけなのか。他にも何か考えなければならないことがあるのではないか。そのような質問を、紀三井寺の副住職・前田泰道さんに伺った。そこには、お寺でのお正月の過ごし方や行事を通して見えてくる、現代へのメッセージがあった。

―副住職さんにとっての「正月」とは

1年の間に積もった「108の煩悩」を除夜の鐘でつき流し、全く新しい日として元旦を迎える、という一つのメリハリの時期だと思います。そもそも、除夜の鐘の108という数字の由来には「三毒煩悩」と呼ばれるものがあり、貪り・怒り・愚痴などを細かく分けて108という数になったと言われています。除夜の鐘がもっとも仏教らしい新年を迎える行事だと思います。元旦は、昨日と同じように東から太陽が昇り、又、夕べには西へ沈んでゆく。毎日が同じことの繰り返しで、何かが変わるということはありません。それでも、行事ということを通して何かを改めて、心を切り換える、それが、お正月ではないでしょうか。

―紀三井寺さんの正月ってどんなもの

やっぱり初詣に来られる方が多いです。年の初めということで「家内安全」「受験合格」「厄除け」などのご祈祷をされる方も大勢いらっしゃいます。そういう方達に気持ちよく拝んで頂くというのが、お寺としての新年の大事な役目と考えています。

また、境内の小さなステージでは、紀三井寺が1239年前にできた当時の踊り「紀三井寺和讃」を、子供達が衣装を着て奉納してくれます。2日には民謡の奉納、3日には大正琴が奉納演奏されます。また、1月3日のみに限ってですが、書初めも行っていて、年の初めに思い思いの字を書いて頂けます。

―昔の正月と現在の正月の違いとは

やはり昔に比べると、メリハリがなくなったなぁと思いますね。私の小さい頃は、この紀三井寺に来られる方でも着物を着ておられる方がたくさんいらっしゃいました。洋服が一般的になってからでも正月だけは着物で過ごすという時期が、一時はあったんです。現在は利便性が第一の世の中ですから、汚しては大変だし、なかなか動きづらいということもあって、着物を着てらっしゃる方をあまり見なくなりました。しかし、時代の流れですから悪いことではありません。

今は昔と違い、正月でも家を空けて海外旅行に行ったりする人も多いですね。遊ぶ場所もたくさんありますしね。ただ、何かを改めるという気持ちが少なくなってる気がしています。時代の流れと共に失ってしまったものは、一人の力ではどうすることもできませんが「改まった気持ちになる」というのが自分自身にとっても得なんだ、ということは伝えていきたいことですね。

―「大掃除」の意味

年末、12月の声を聞くとぼちぼちかなと思い、大掃除の準備を始めます。仏教では掃除という事をとても大事にします。その元には、周利槃特（しゅりはんどく）（チューラパンタカ）のお話があります。食べると物忘れをするといわれる「茗荷」の名の由来になった、名札を荷なって歩いたお坊さんのお話です。

周利槃特（しゅりはんどく）（チューラパンタカ）のお話

その昔、チューラパンタカというお釈迦様のお弟子がいました。この人はとてもものんびりとした人で、経文はおろか自分の名前すらも全く覚えられないでいました。自分の名前すら忘れてしまうものですから、自分の名前を大きく書いた名札を首から下げ、それ故にお寺（祇園精舎）の中でいても、からかわれていました。

チューラパンタカは自分の頭の悪さに落胆し、ある日、涙ながらにお釈迦様に故郷に帰ると言いました。すると、お釈迦様は、「何も泣く事は無い。お前はもう何も覚えなくて良いから、その代りに毎日、箒と雑巾で寺中を掃除しなさい。その時に『塵を払って垢を拭いましょう』と繰り返し唱えながらやりなさい。」と言いました。チューラパンタカはこの教えを固く守り、毎日毎日寺中をピカピカに掃除しました。

そんなある日、お釈迦様の代わりに、誰かが代理で説法を行うことになりました。誰を指名するのかと寺中が騒ぎましたが、なんとお釈迦様はチューラパンタカを指名したのです。これにはチューラパンタカ自身も驚きました。そして、何か話さなくてはいけないと壇上に立った時、大きな声で『塵を払って、垢を拭いましょう』と、たった一つ覚えた言葉を大きな声でいいました。その時に、他の弟子達やチューラパンタカ自身も初めて、心の塵を払い心の垢を拭うことこそ仏教の教えそのものだと気付いたそうです。

お釈迦様は掃除を通して、仏教の教えを伝えたのでした。それ以後、チューラパンタカは熱心に仏教の勉強をしたそうです。みなさんもそんな意味を考えながら、今年の大掃除をなさってみてはいかがでしょうか？

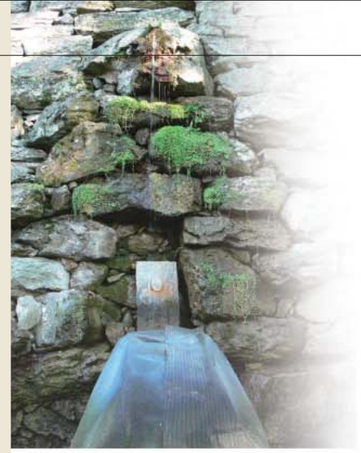
―新年に向けて…年を取るということ

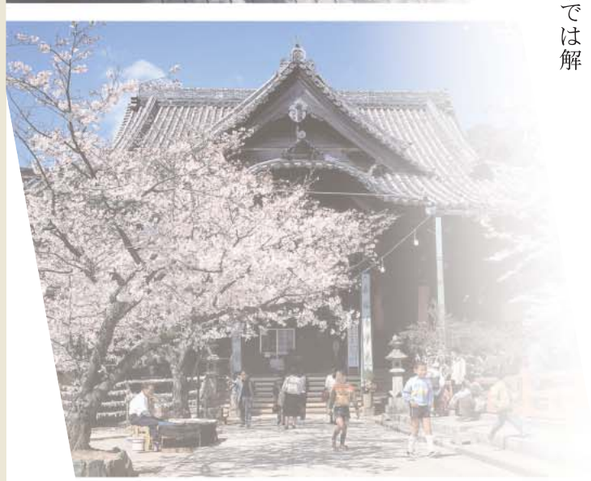
四季が巡り、年中行事が繰り返されて、同じ所をグルグルとまわる様な一生ですが、私はその螺旋階段を一歩ずつでも良いので、登っていきたいと思っています。

人は皆、年と共に体力は衰えていきます。しかし、年齢と共に上っていくものもあります。今日の日本では、新しい情報や流行が凄まじいスピードで世に溢れ、お年寄りの方の持っている「人生の厚み」「経験で培った知識」など大切なことが時代遅れだとされてしまっています。それは、若者が知るべきことを知らないでいるのだと思います。お年寄りの方々が知っていて、若者が知らないこと…、その中に本当に大切なことがあるということに気づいていない。そこには昨今の世相に表れている様に、日本という国が間違ってきている大きな原因があると思います。

一昔前のエスキモーやインディアンの若者はお年寄りをとても大事にしました。「宇宙の神秘」「人生経験」など、自分達では到底知りえないことを長老は知っているということを、若者はとても良く理解していたのです。新しいものは、新しいもので良い所はあります。科学技術も日進月歩で進化していきます。でも、それだけでは人は生きていけません。

お釈迦様は『四苦八苦』ということを言っています。生老病死の「四苦」に加え、愛する人と別れる悲しみや憎い人と会わねばならない苦しみなどの「八苦」です。これはどんなに時代が進歩したとしても変わることはありません。ものが増え、暮らしが豊かになってもこの苦しみからは逃れられないのです。自分自身の心の苦しみだけは、科学では解決できません。どうしたら苦しみを乗り越え、希望をもって生きていく事ができるのか。仏教の教えやお年寄りの知恵のなかに「こうしたらええんやで」というのが本当はあるんです。人は「見方」によって、苦しみが苦しみでなくなり、かえって楽の種になることもあるのです。





紀三井寺は、大晦日深夜の除夜の鐘～1月3日まで参拝料が無料になります。
この機会にご参拝されてみては如何でしょうか。
さらに除夜の鐘をつきに参られた方に、左図の「除夜の鐘証」をお渡ししています。（先着108名様）

インタビュー2

松原右樹氏

民俗学者

Mareki Matsubara

1943年和歌山市に生まれる。国学院大学文学部卒業後、産経新聞記者を経て大阪府立高等学校教諭、大阪府高等学校国語研究会副理事長を歴任。現在は和歌山大学、NHK文化センター等で非常勤講師をする傍らで、日本民俗学会員として熊野街道現地講座など年間200回を越す講演を行っている。

『正月様ござった』日本の文化・伝統の文化

正月様ござった、
どこまでござった。
きりきり山の下までござった。
お土産に何持って、
小豆俵に米俵

――などという「童謡」がある。この歌の内容からもわかる通り、昔の人々は現在と違い神様を迎えるという感覚があった様だ。古くから、日本では新年とはどんな伝統があるのか。当たり前だと思っていた、新年の風習の由来などを、民俗学者・松原右樹先生に伺った。

そもそも正月様とは「年の神」のことであります。他にも恵方神、年殿（としどん）、などなど地方によって呼び方は様々です。「トシ（年）」とは稲の古語のことで、かつては稲を1回収穫する事が「ヒトトシ（一年）」と考えられていました。古代日本で農耕が発達するにつれて、年の初めにその年の豊作が祈念されるようになり、それが年神（としがみ）を祀る行事となって正月の中心になっていったようです。年の初めに正月様は高い山から、里へ降りてきて、全ての生物に躍動力を与え、生きとし生けるものの生命を新たに蘇らせたそうです。そして、年神さまから授かった力で、魂の張る状態になる。つまりそれがハル（春）という季節の由来でもあります。

また現在でも残る「お年玉」の習慣にも正月様は深く関わっています。今日の日本では、子供達の喜ぶお金になってしまったが、もともとは、トシダマ（稲霊・穀霊）は「お餅」だったのです。大晦日の夜更けに、首なし馬にまたがり、鈴をならしながら、正月様はやってくる、と考える地方もあったようです。民間信仰の神様ですから、いろんな姿に考えられていたのでしょう。

最近は少なくなりましたが、門松も単なる飾りではなく、正月様が来訪するためのヨリシロ（依代）としての意味がありました。カド（門）で神を待つ常緑樹が立てられました。松に限らず、サカキ・シキミ・ナラ・タラ・ツバキ・竹などが用いられたわけです。紀南地方ではシイの木も用いられていました。明治以降、クリスマスツリーを飾る習慣が日本に定着したのも、その背景には、私達の国のこういう習慣があったからなのです。

「おせち料理」は保存のきく作り置きの正月料理となっていますが、これは「正月様をお迎えしている新年に台所を騒がせてはならない」という考えによるものです。昔、元旦の厨房には女人を入れず、その家の主人が料理を作る風習もあったようです。お雑煮も正月様に供えた「供え物」を、みな一緒に混ぜて煮たのが始まりです。

こうした代表的な習慣の由来に見るように、われわれの回りにある何気ないことにも一つ一つ意味があり、その中でわれわれ日本人は、季節の折り目、繊細な心の動き、また自然と通じる心を培ってきたように思います。そんな意味を考えてみると、累々と重ねてきた心象の累積、つまり時代を超えて連なる人々の心に一瞬触れる気がしてうれしく感じます。正月行事のみではなく、日本固有の文化の衰退とともに折り目正しい日本人の心も衰えていかぬようにと思う、今日この頃です。

鹿児島県こしき島のトシドン（正月様）。トシダマのモチをもらわねば子供たちは年をとれない。

漁師の町「加太」鯛の一本釣りはまさに男のロマン

加太の鯛

紀淡海峡の速い潮流に育まれた加太の鯛は、身が引き締まり味が良いことで知られる。友ケ島沖を漁場に、ほとんどの漁師が「1本釣り」という漁法を昔から続けている。魚や海産物を生きたまま水揚げする1本釣りは底曳きとは違い、漁場を荒らしにくい。それでも、今の加太港の漁獲高も水揚高も最高時の3分の1ほどになった。バブルの頃は380軒を超えた漁師も、現在は170軒まで減った。「加美安」3代目にあたる加美誠さん(44)も、そんな一本釣りの醍醐味に魅せられ続けて26年の加太の漁師だ。

「子どものころから、おじいちゃんに船に乗せてもらった。厳しい人やったで。それでも、そのころから好きやったんやろうなぁ」と幼少を振り返る。そんな祖父の加美安一さんは、鯖の皮を干して作る新しい擬似餌(ぎじき)を加太に紹介した人だという。その擬似餌も、今ではプラスチック紙が主流だ。釣り糸も、天然素材からプラスチック、そしてカーボンへと変わった。また、昔は漕ぐ人と釣る人で協力して漁に出かけたが、今はエンジンと魚探機を搭載して1人で漁に出る。このように器具については改良が極められたといえるかもしれない。しかし、潮の流れ、風、光、魚の「食い気」などは、器具にはどうにもならない。「天性」と「努力」と「忍耐」が求められるのは、今も昔も変わらない。

シンプルな漁具だが沢山のアイデアがつまっている。

中型のハマチ。本命の鯛ではなかった。

小型のサワラ。今晩のおかずになった。

加太の鯛は改良が極められたといえるかもしれない。しかし、潮の流れ、風、光、魚の「食い気」などは、器具にはどうにもならない。「天性」と「努力」と「忍耐」が求められるのは、今も昔も変わらない。

加太では、鯛の他に、ハマチなども釣れる。しかし、加美さんはあえて「鯛」を狙う。「男のロマンばかりいうてられへん、食べていくことも考えやなあかんときもあるけどな…」と、今日も真剣な眼差しで舵を取る。

加美さんの3人の娘さんたちは、夏休みなどに友だちを家に呼んでくるそうだ。「『パパ、刺身用意しといてよ』『バーベキューやってよ』とか、いわれるんや」と照れ笑いする。「今の家庭には「出刃包丁」も大きな「まな板」もないんやから、漁師も上がってきた魚をそのままで売るようなイメージを直さんとあかん時代になってると思う」「でも、ほんまに美味しい魚食べたら、そりゃ『魚嫌い』なんていわへんで」――新鮮な魚に勝るものはない。そんな「加太の鯛」は、漁師のロマン、自然の恵み、和歌山の宝だ。

終始笑顔で応えてくれた加美さん

マル特情報 加太の昼市

加太の漁協が主催する昼市では、加美さんのような漁師がとってきた活魚を、特売価格で買うことができる。いけすを泳ぐ魚から選ぶことも可。また買った魚はその場で漁師がさばいてくれる。

1月を除く、毎月第1土曜日、11時から14時まで、加太港の加太鮮魚前直売所にて開催。

詳しくはHPを
http://kada.sengyo.com/

加太淡嶋神社の針供養

新春のあわしまさん

和歌山市加太の西端に位置する加太淡嶋神社は、女性の病気回復や安産、子授けを祈願する神社として有名だ。1700年以上の歴史を持つ全国の淡嶋(粟嶋)神社の総本社でもある。殊に有名なのは3月3日の「雛流し」で、全国からの観光客が加太の海岸線を埋め尽くす。

その淡嶋神社には、もう1つ、知る人ぞ知る新春の祭事がある。針供養がそれだ。

針供養の始まりは、淡嶋神社の祭神である少彦名命(すくなひこなのみこと)が裁縫を初めて伝えた神様であることに由来するといわれるが、前田光穂宮司は「昔は、針仕事ができないと嫁にいけないほど、女性にとって重要な仕事だったはず。針に対する感謝と針仕事の上達を祈る気持ちが、自然にこの風習を生んだのでしょう」と話す。

しかし近年、供養される針が減少している。15年前と比べると2分の1から3分の1くらいだそうだ。「針仕事をする女性の姿は、大切な人への思いやりにあふれ、すてきなのですが…」と宮司も寂しさを隠せない。

針供養の儀式は、いたって簡素だ。本殿で針を針塚に入れる報告を行ったあと、針が土に還りやすくなるよう塩を振りかけて、針塚に埋める。この間約30分。しかし、この短い時間がとても厳かで、心身ともに引き締まる雰囲気に包まれるのだという。全国から情熱をもって針仕事に携わっている人たちが参拝し、その人たちが上品で凛と張り詰めた空気を作り出すのだという。「今年も無事に終えたという充実した気持ちになりますね」と前田宮司にとっても、思い入れが深い祭事だ。

今年も2月8日、日本全国から役目を終えた「針」が集まり、加太の地で供養される。

淡嶋神社 春の行事
2月8日　針供養
3月3日　雛流し
4月3日　春の大祭

道を楽しみ・歴史に浸る 和歌山城から秋葉山へ…「緑道」みどりのみち

和歌山城から秋葉山にかけてのウォーキングコースとして、「緑道」という名の道があることを、ご存知だろうか？

和歌山市民の健康を促進する緑道

昭和60年頃、和歌山市が企画・設置した道が、現在も一部を除いて残され、地元住民を中心に散歩コースとして親しまれている。

実際に歩いてみると、川辺あり、公園あり、山道あり…非常に変化に富んでいて、飽きさせないコースである。

日頃、運動不足の方には、気持ちのいい汗をかけることうけあいであろう。

移りゆくすがた 変わりゆく景色

現在、「緑道」には部分的に閉鎖されている箇所があり、今回ご紹介する道は、実際の「緑道」とは少々異なるルートである。しかし、それを差し引いても、バラエティに富んだコースであることに変わりはない。

本来、児童の野外授業や市民の憩いの場として「緑道」は設置された。しかし、現在はこれらの目的ではあまり使われていない。

例えば「真砂浄水場」付近にあったかつての「緑道」であった箇所は現在封鎖されるなど、一部は既にその役目を終えている。

地元住民に愛される「緑道」

鉄柵で封鎖されているところもある「緑道」は、けっして恵まれた状況とは言えない。しかし、地元住民が自主的に草刈をするなど整備され、市民に愛されている道である。夕方や休日などにはウォーキングを楽しむ人も多い。

現在も開放されている「打越山」山頂コース。封鎖こそされていないものの、かなりの急斜面で、雨の日などは要注意。

登頂すれば、和歌山城が見える。

桐蔭高校東側のルート。
独特の雰囲気がある。

打越山頂上からは、和歌山市内を一望できる。
和歌山城を見ることも可能だ。

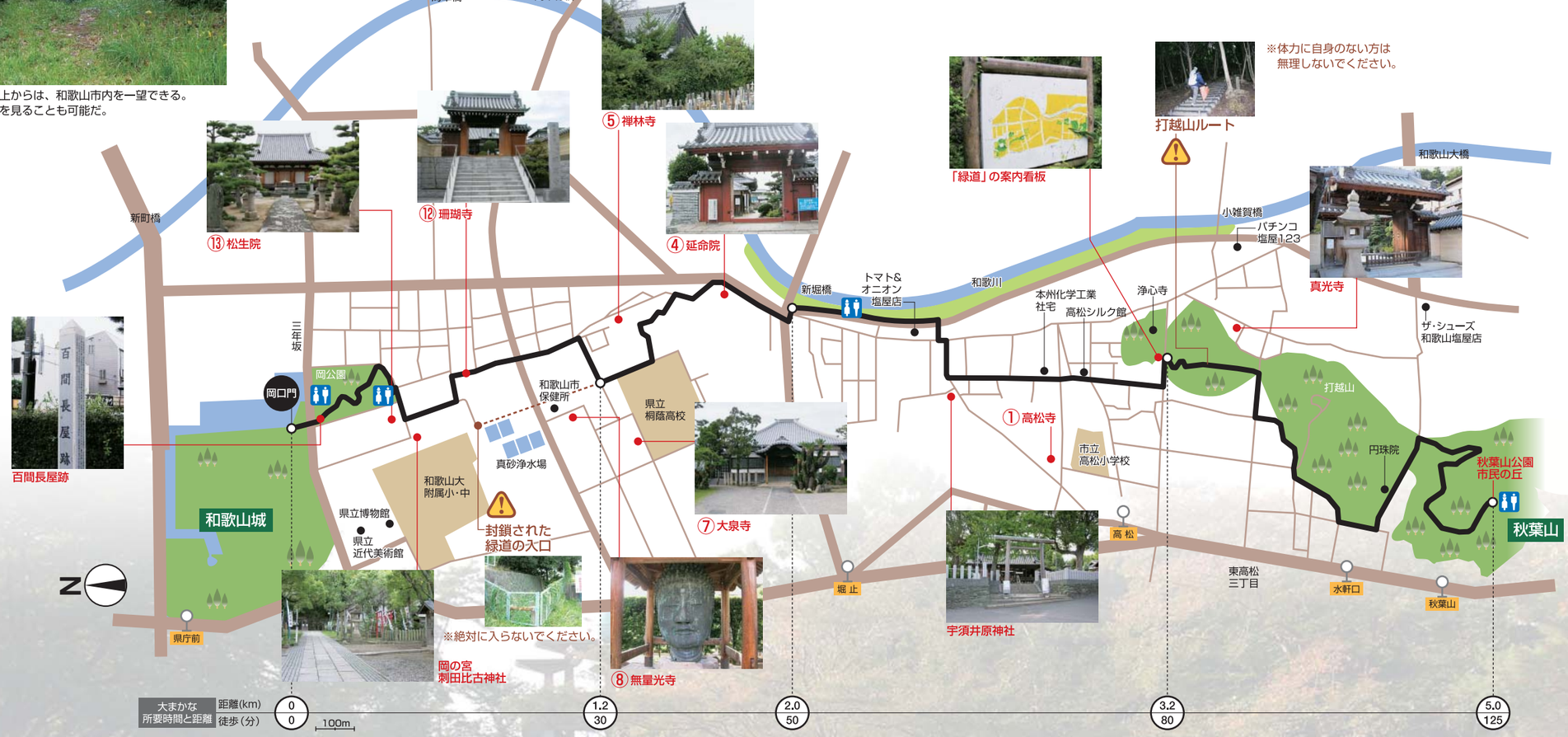
和歌山西国三十三所観音霊場の寺院など 見どころが点在

道中には、大きな魅力がある。この「緑道」沿いには、和歌山市の観音菩薩巡礼地である「和歌山西国三十三所観音霊場」の寺院が点在しているからだ。

実際の「緑道」から少し外れている寺院もあるが、ちょっと寄り道をして、散策してみるのも、これもまたおもしろい。

下記地図には、三十三所霊場の他にも寺院をご紹介しているので、「緑道」と一緒に、これらの寺院も楽しまれてはいかがだろうか。

※注:寺院名の前の○囲み番号は、「和歌山西国三十三所観音霊場」の札所番号です。



※注:徒歩の時間は、休憩せずに歩いた場合の目安です。実際に歩かれる方は、ご自分のペースでお楽しみください。

秋葉山公園「市民の丘」。
天気のいい休日は、子供連れの家族などで賑わっている。

紀伊風土記の丘

考古・民俗と自然のミュージアム

今回の特別展では、復元作業の進む大日山35号墳の埴輪群像を中心に、周辺の主要古墳の出土遺物を一堂に集め展示する。

大日山35号墳は6世紀前半のもので最大級の古墳である。平成15～17年度の発掘調査の結果、長さ約86ｍの前方後円墳であることが判明した。埴輪などの遺物は約３００箱出土しており、復元作業により続々と珍しい埴輪が見つかっている。

埴輪は人物や動物、武具などの道具の形を粘土で作り焼き上げたもので、古墳の上に据えられていたものである。大日山35号墳では「両面人物埴輪」「翼を広げた鳥形埴輪」「胡籙（ころく）形埴輪」といった日本初例の埴輪３種類を含む埴輪群像が出土し、その独創的な造形が評判を呼んでいる。このほかにも、高さ約90㎝、長さ１ｍを越す馬形埴輪など、見ごたえのある埴輪を多数展示。大日山35号墳の埴輪以外にも、近畿地方の代表的な埴輪群像として知られている井辺八幡山古墳の埴輪や、天王塚古墳・井辺前山６号墳の色とりどりの装身具など、美術的にも優れた展示品が並ぶのでこれは必見。

特別展「岩橋千塚」

平成20年12月2日（火）
▼
平成21年2月22日（日）

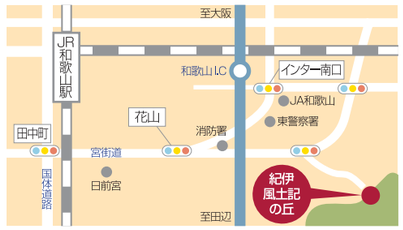
開催場所　和歌山県立紀伊風土記の丘
〒640-8301　和歌山市岩橋1411番地
TEL 073-471-6123
FAX 073-471-6120
ホームページ
http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp
Eメール
kofun@kiifudoki.wakayama-c.ed.jp

開館時間　9:00～4:30（入館は4:00まで）

入館料　一般350円（290円）
大学生210円（160円）
＊（　）内は20名以上の団体
高校生以下、65歳以上、障害者手帳をお持ちの方及び県内在学の留学生・就学生は無料

休館日　月曜日（月曜日が祝日の場合、翌日）
年末年始（12月29日～1月3日）

交通　JR和歌山駅東口から和歌山バス「紀伊風土記の丘」行き、終点下車
阪和高速道路「和歌山インター」から5分
駐車場80台・無料



両面人物埴輪

大日山35号墳
馬形埴輪

大日山35号墳
ころく形埴輪
（矢を入れる道具の埴輪）

大日山35号墳
翼を拡げた鳥形埴輪

催し物案内　★…要申し込み　●…見学自由

★1月24日（土）13:30～15:30
特別講演会「古墳の他界観」和田晴吾（立命館大学教授）

★2月7日（土）10:00～15:00
「大日山の埴輪を作ろう」

★1月17・31日、2月14日（土）13:30～15:30
古墳ガイドツアー

●1月6日（火）9:00～16:30
大日山35号墳石室公開（見学自由）

紀伊風土記の丘　探索マップ

紀伊風土記の丘を散策

和歌山県立紀伊風土記の丘は、全国でも有数の古墳群である、特別史跡「岩橋千塚古墳群」の保存と活用を目的として、昭和46年に設立された考古・民俗の博物館施設だ。

紀伊風土記の丘には散策ルートがあり、ぐるっと一周すると約２時間程度を要する。頂上の展望台からは和歌山市を一望できる。

古墳群には大小様々な古墳があり、県内最大規模の前方後円墳である大日山35号墳をはじめ、４・３メートルの石室高をもつ将軍塚古墳などを見ることができる。

移築民家

入口付近には、遺跡を参考に復元した古墳時代の竪穴式住居や、江戸時代から残る古住居を移築したものが見られる。旧柳川家住宅は海南市黒江の漆器問屋の商家、旧谷山家住宅は海南市下津町の漁家、旧谷村まつ氏住宅・旧小早川梅吉氏住宅は農家だ。それぞれ今から２００～２５０年程前に建築されており、貴重な建築物である。

万葉植物園

「万葉集」（奈良時代）に詠まれている約70種の植物を、所々に立てられている万葉歌碑と共に、春には桜、秋には紅葉と四季折々に楽しめる。知的好奇心をくすぐられる貴重な文化財を見学しながら、健康のためのウォーキングもかねられるので、休日にピクニックがてら家族で行くのもいいだろう。

ほうぼ わかやま 第2号
2008年12月15日 発行人／松田好司 編集人／大泉英次 発行／株式会社ウイング 本社 〒640-8411 和歌山県和歌山市榎取17-2 TEL.073-453-5700／FAX.073-453-5522
E-mail:mail@w-i-n-g.jp http://w-i-n-g.jp

施設紹介 2

和歌山市立博物館

和歌山城が築城されてから400年目にあたる昭和60年に開館し、郷土和歌山の歴史・文化遺産に関する理解と認識を深め、教育・文化の発展に寄与することを目的とした歴史の博物館。

「資料が語る和歌山の歴史」をテーマに、原始から近代の貴重な文化財資料が展示されている。

常設展示している市内の古墳や遺跡から出土した馬冑や銅鐸、力士像埴輪など、貴重な展示物を見ていると、それぞれの時代の和歌山を想像できる。

特に国の重要文化財に指定されている馬冑は、大陸との関わりを示すものであり、完品として出土したのは全国的にも珍しいものだ。

また08年NHK大河ドラマ「篤姫」で登場した14代将軍徳川家茂が紀州藩主時代に残した一行書も展示しており、一見の価値がある。

力士像埴輪

蘭有秀（らんゆうしゅう）
徳川慶福（家茂）書

所在地／〒640-8222 和歌山市湊本町3−2　TEL 073−423−0003
開館時間／午前9時〜午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日／月曜日、祝日の翌日
※月曜日が祝日の場合は開館、翌日が休館となります。
※年末年始（平成20年12月28日から平成21年1月5日まで）
入館料／一般250円（団体 200円）高大生150円（団体 120円）小中生100円（団体 80円）
※ただし、特別展は別料金になります。　※毎土曜日は小中高生無料。
※団体は30名以上。　※都合により、内容・日時等を変更することがあります。
※身体障害者手帳をお持ちの方、入館料はすべて無料です。
※和歌山市が発行する老人優待利用券を受付で提示していただくと本人のみ無料となります。
館内の案内など、できる限り対応いたします。
館内設備／エレベーター及び階段には手すりがあります。
誘導ブロックは入口まであります。
（館内は作品・資料等運搬のため設置できません）
車イス4台。ベビーカー2台。
駐車場／有料（1時間まで100円、以後30分ごと150円）
市民図書館前市営駐車場（身障者用駐車スペースあり）

馬冑
（重要文化財）
文化庁所蔵

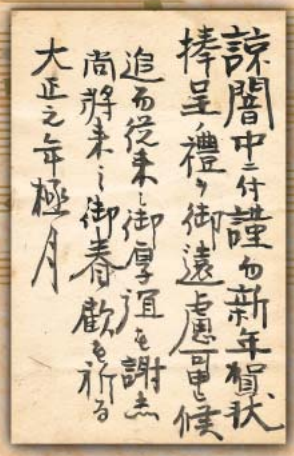
年賀状に映る、時代の世相

～大正2年に送られた貴重な年賀状～

明治45年7月30日、明治天皇の崩御にともない明治から大正に年号が変わった。国民が諒闇（りょうあん）（喪に服す）し、予定された行事などは中止か延期となったが、次の年の年賀状は例年通り配達された。しかし、年賀状を出すのを控える人も多く、現存する史料の中でも極端に少ない大正2年の年賀状が、旧紀三井寺村（現和歌山市）の庄屋をつとめていた岩崎家に保存されていた。

一見、普通の喪中ハガキに見えるが、天皇の崩御に国民全体が諒闇していたことがわかる珍しい年賀状で、その時代の世相を伺う事ができ、面白い。

諒闇に配慮した年賀状


（資料提供／田葉元一氏）

岩崎家とは

旧紀三井寺村（現和歌山市）の江戸時代に庄屋をつとめ、明治・大正を通じて戸長、村会議員、村長もつとめる。その関係から幕末を始めとし、明治・大正の村政に関する史料を多数保存している。

編集後記

歴史と文化の情報誌『ほうぼ　わかやま』第2号をおとどけします。本誌がみなさんにもっと親しみをもっていただけるようにと考えて、タイトルの書き方を改めました。

第2号の特集は「お正月」です。新しい年を迎え、心を新たにする大切な節目。そんな時に、私たちの暮らしのなかに引き継がれている「お正月の文化」の意味を再発見したいと思います。読者のかたがたにご提供いただいた貴重な史料となる年賀状もご紹介しています。ご協力に深く感謝いたします。

「紀州の歴史・文化」のコーナーでは加太をとりあげました。鯛の一本釣りにかける漁師さんの心意気をお聞きしました。そして淡嶋神社の針供養。ここにも大切にしたい私たちの文化があります。

「散策・まち歩き」のコーナーでは和歌山城から秋葉山までのルート、そして紀伊風土記の丘の散策ルートもご紹介しています。いずれも編集スタッフが眼で見、足で確かめたものです。みなさんもぜひどうぞ。

歴史のなかで育まれた文化は、私たちの心のよりどころであり、また栄養でもあります。ふるさと和歌山の文化を「ほうぼ」（あちこち）に再発見することが、和歌山を元気にする力づくりにつながると思います。本誌がそのお役に立てるよう、みなさんのご協力をお願いします。お読みいただいた感想や、これぞと思われる情報をお聞かせください。

第2号編集長　大泉英次

株式会社ウイング 印刷から、新しい価値の創造を。
株式会社ウイング／一般商業印刷物の企画・デザイン・製造を主体とし、情報化サービスや印刷付帯サービス、さらにデジタルメディアなどの活用を視野に入れた「新しい印刷業」を目指している企業です。　［沿革］創業36年。2005年に中央印刷株式会社から株式会社ウイングに社名変更。

本誌掲載の記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。